

4年間に渡る、私の愛した御茶ノ水の街に或る甘酸っぱさを持って、別れの歌を送りたい。

明大通りを中心として、左右に二百メートルの幅、長さ三百メートルぐらいの広さを持った街であった。北の方は汚れた神田川とその向こうの医科歯科大に遮られ、水道橋駅寄りに御茶ノ水橋、秋葉原駅寄りに聖橋が在った。

この街が私の青春だった。

今から5年前1968年4月、明治大学へ入学した。

当時の受験生の多くがそうであったように私も多くの大学を受け、明治大学Ⅱ部へ入った。Ⅰ部を受けて落ちた為、やむなくは入ってきたというのが、当時の私の実感であった。東京で育ったこともあって、別に大学へ行くことに目新しい感慨は無かった。私の中に何ら意思性が無かったとしても、御茶ノ水の街にその時やって来た。

大学では本館の中庭で、新入生に対する各サークルの勧誘が行なわれていた。私も何気なくその場を一人の新入生としてプラプラ歩いていた。先ず、目に付いたのは柔道部だった。

高校時代は三年間柔道部いた。しかし、一年間の浪人生活で、体は柔道に適さなくなっていたし、スポーツにそれ程の価値も既に持つて無った。

その時、一人の小太りな学生が声を掛けてきた。「君は新入生か?」「はい」「僕は経済研究部の者だけど経研に入らないか。」「……」「一度、部室に来てみないか。面白いサークルだぜ。」

大学自体には何の魅力も感じて無ったが、浪人生活からの解放感は感じてい

たし、また、より感じたかったのだろう。言われるままに彼の後に付いて行った。彼が案内していった所は会計課の真下、本館の地下の通称“モグラ横町”と言われているサークル部室の多く集まっている場所の一角に在った経済研究部の部屋だった。

モグラ横町の各部屋からは明るい笑い声が洩れていた。

この時期がモグラ横町の一年間で、最も華やかな時であろう。

各々のサークルが新入部員の獲得に躍起になっている時で、春の恒例の催物でありペギー葉山の“学生時代”的歌のイメージを唯一ダブらせることのできる時期だった。

部屋では五、六人の男と女の人が雑談をしていた。

彼らは私を暖かく迎えてくれた。

経済研究部はマルクス経済学を学習するサークルである事。各部員は社会変革に向けて活動を行う事。学習会は各学年ごとの学習会と、年間テーマの学習会があり、68年の年間テーマは“沖縄”である事など一通りのサークルの説明がなされた。そして、強くサークルに入る様に勧めた。

そこには左翼の活動家の持つ独特の明るさと、人を引き付ける粘り強さを感じられた。

私は入会証へのサインとに入会金百円を払わされた。

御茶ノ水駅を降りて、明大の方へ向かって駿河台の坂をダラダラと降りて行き、記念館の先を右手に曲がると、神保町から連なった駿河台下の商店街に行きあたる。学生相手の食堂や喫茶店、ジャン庄などが軒を連ねていた。サークルの先輩たちと連れ立って、“キッチンオトボケ”やトンカツ屋“さつま”などによく食事に行った。

大学の食堂は二ヵ所に在った。一つは学生会館に生協の食堂が、もう一つは記念館の地下に師弟食堂があった。生協の方は毎日メニューが変わるが種類

が少なかった。師弟食堂の方は種類が多く大きかった。生協の定食が百円、師弟食堂のBランチが八十五円だった。

金の無い時は師弟食堂で狸うどんが三十五円で食べられた。

もっと面白い事には、二つの食堂にはそれぞれ繩張があった。

当時の明治の学生運動には二つの大きな勢力が存在していた。

一つは三派全学連に代表される新左翼系、一つは民青系の学生運動であった。

自治会は三派系のMし派が握っていた。自治会室は学生会館に在ったので、

三派系は生協食堂、民青系は師弟食堂が各々の繩張りであった。

私たちのサークルは部室が記念館の地下にあり、民青系の部員も多かったので、食堂は師弟食堂をよく利用していた。両方の食堂とも味は格別という訳に行かなかったので、やはり駿河台下に降りて行く事が多かった。

サークルでは土曜日に一年生のために『物の見かた考え方』の学習会が行われ、唯物史観の最も初步的な学習が先輩たちの指導で行われていた。

O Bも一人指導に来て、例えば『赤いバラは何故赤いのか?』また『机の下の百円玉は存在するといへるのか?』など私にとっては哲学に接する初めての経験だった。高校までの教育では哲学的思考の学習は皆無であり、浪人と言う非常に偏った思考を身に着ける訓練に慣らされた私には新しい発見だった。次第にその独特の世界にめり込んで行った。

その年の秋、11月に行われる駿台祭の研究発表テーマ“沖縄”的研究会が水曜日に持たれていたが、入部した5月頃はまだあまり活発には行われていなかった。研究会が無い日でも、何時も部室には誰か彼かが居て雑談をしていた。

その頃のサークルには三派系と民青系の両派の部員がいたが、三派系部員はシンパサイダー程度で、勢力が弱かったので両派は共存していた。

対外的には経済研究部は民青系のサークルという評価が一般的であった。

御茶ノ水には通称“マロニエ通り”と呼ばれている通りがある。

明大の学生会館からアテネフランセに抜ける道である。木のことはよく知らないので、その通りの両側の街路樹が本当にマロニエかどうかは判らないが、

昔からマロニエ通りと呼ばれていた。秋には広い葉を落すマロニエの樹の並ぶ通りがこの街で最も落着いた文化的香りの漂う所に私には思えた。

明大の先には画材屋があり、その先の右側には戦後、埴谷雄高らが一時集まっていた文化学園があり、さらにその先にフランス語学校の“アテネ・フランセ”が在った。この通りを本を小脇に挟んで歩けば、それだけでロマンチックな気分になれたと思うけど、私にはそのような時は来なかった。

3

6月に入ると大学には政治の季節がやって来た。

去年の10・11月闘争を戦い、1月のエンタープライス闘争、3月の王子野戦病院闘争、4月の三里塚闘争と戦って来た三派全学連が運動の最高揚期を迎えて、明治大学でも三派系の運動が活発になって来ていた。

サークルでは主に政治活動を行っていたのは民青系の人達で、三派系の人達はまだシンパ程度だったので、どうしても評論家的でしかなかった。

私もマルクス主義を学ぶにつれて、その思想がただ思想家や哲学者たちの為でなく革命の為、プロレタリアート、人民の為に書かれたものであり、その思想は常に実践を要求していることを学んで行った。

民青系の運動には何か革命を希求する心が欠けているように思われた。たしかに三派系のやっている事は方法論として問題があると思えたが、彼らが去年から社会にアピールして来た事は事実だったし、運動は歴史の弁証法の中で、正・反・合の反を社会にぶつけて行くものだと言う彼等の学生運動起爆剤論にも一理あるなあと思えて来て、次第に三派系の理論に引かれていった。サークル内では上江洲、金子、野村といった先輩たちが三派系だった。

6月18日に学生大会の公示がなされ両派のアジテーションが学内を包んでいった。

サークルでも学生大会に向けた討論が行われていたが、両派の意見はまとま

らず、結局、慣習に従って幹事長を代議員として選出したが、投票は棄権ということで話はまとまった。幹事長は民青系の北村さんだった。

6月28日には経済研究部の年間テーマの沖縄問題の講演会を講師に新崎盛輝氏を呼んで行う予定で、その準備に追われていた。講演会の情宣係だった。情宣活動というモスクルを大学に入って初めて経験した。

ビラを作ったり、立看を立てたりしたが、学生大会を控えて情宣活動はなかなか進まなかった。

6月15日、水曜日だったと思う。日比谷公園で三派全学連主催の反安保集会が行なわれ、野村さんらと連れ立って参加した。途中から雨が降りだしたが、集会はなかなか開かれなかった。理由は新左翼の運動が常に抱えていた党派闘争だった。その時、争っていたのは中核派と革マル派で、両派は会場の入り口で竹竿を構えて鋭く対峙していた。

8時頃、詰合いが着いたらしく、革マル派が会場から退場して集会は始った。雨が次第に激しくなり、野村さんたちは大学に戻った。皆が権さんの為に黙祷を捧げている時、会場の後ろから革マル派が中核派に襲いかかった。

中核派はひとたまりもなく駆散され、演壇では逃げ遅れた五十人ぐらいの中核派が竹竿で激しく殴られていた。集会はメチャクチャになり、雨の中、芝生の上のあちらこちらに血だらけの怪我人が横たわり、何やらわめいていた。この光景はショックだった。党派闘争いわゆる内ゲバに直面した最初で「何故だ。」「何故だ。」と呟きながら日比谷から新橋まで歩いたが、何処をどう通って歩いたのか、全く記憶がない。

それまで、抱いていた人民が反権力として、権力と戦うという構図そのものが崩れ、闘いの中で払い切ることの出来無い、毛沢東の言う「人民内部の矛盾」党派闘争が、この時、はっきりと目の中に焼付いた。

大学に帰ると、まだ沖縄の研究会が続いていた。

真っ青な顔をして「学生運動なんかやらない。」とか、何かゴモゴモ言いながら部室に入ってきたらしい。服もビショビショで、精神的にもまいっていて、気も動転していた。

「下宿に泊まらないか。」と上江洲さんが誘ってくれた。

- 5 -

自白の下宿に行くと、秋山勝行の本を見せながら現在の学生運動の状況を説明し『現在の混迷を突き抜けて70年安保闘争へ進まなければならない。』と力強く励まされた。私たちの運動は常に『……でなければならない。』という意識で、突き進んで行ったのではないだろうか。

この夜、上江洲さんの下宿に泊まらなかったら、以後の私と御茶ノ水の街の関わりも変っていただろう。

4

II 部だから授業は夕方からだった。

夜、大学の始まる時刻にならないと、その街には行かなかった。

私自身が御茶ノ水の街に未だ馴染んでいなかった。昼間は喫茶店で本を読んでプラプラしていた。

5月の末になって、アルバイト始めた。バイト先は神保町の栗田書店で、本の梱包の仕事で、日当は千円だった。

大学の学生課で、このバイトを見つけた。学生課というところは実にいろいろな仕事をしているところである。

学生課の真の役割については、後日、彼等との深い関係を持たざるを得なくなるので、その折りに触れてみたいと思う。

仕事は朝9時から5時まで、一日中本を包む作業であった。

薄暗い作業場で毎日毎日同じ作業の繰返しである。本は包んでも包んでも大きなトラックで運び込まれて来た。大学に近いことだけが取り柄のバイトだった。

私は栗田書店に直接雇われたのではなく××梱包という下請会社から派遣されていた。ここにも下請けという日本の産業構造の暗い現実があった。

仕事はきつかったが、同じ職場にいた十数人のバイトは皆明治の学生だったので、楽しい事も多かった。

土佐出身の林君がいた。彼は政治研究部に入っていると言った。政研はブン

- 6 -

ドの影響が強く、過激なサークルとして知られていたが、彼の人柄は土佐っ子らしい骨の強さと共に何處か田舎から出てきた者というおっとりしたところが有り、年も同じで、直ぐに親しくなり、仕事をしながら色々な事を話合った。

私は覚えたてのインターナショナルやワルシャワ労働歌を教えた。仕事をしながら労働歌を唱い、議論が出来るのもバイトという身分の気楽さと下請け制度という管理の極めて緩やかな職場だったからだろう。

その外、バイト先で親しくなった人に武田という山形出身の学生がいた。やくざの息子で私や林君より二三年先輩であった。今までに様々な仕事を経験していて、ポン引きや女性下着のセールスマンもやった事も有ると話していた。株や競馬が好きで、我々の知らない面白い話をしてくれた。彼は右翼的なことを言って肌が合わなかつたが、次第に気が合うようになってきて労働歌と一緒に唄うようになつていった。

6月末に我々は給料値上げのストライキを計画した。しかし、準備不足で、皆の足並みが揃わず、結局、私や林、武田など五、六人の山ネコストに終つてしまつた。

発想が実感としての不満の域を出でていなかつたので、行動が思い付でしかなかつた。そんな事があつて、このバイトが嫌になり止めてしまつた。

6月18日、学苑会学生大会が開催された。

この学生大会はその後の明治大学の学生運動を左右する重要な大会だった。中央自治会の学苑会はML派、学部自治会のII政、研連はブント、II文は青解の三派系各派が、それらに対して、II商、II法を民青系が、それぞれの自治会権力を握っていた。

68年当時、三派系各派と民青系の勢力は均衡状態で、執行部の議案書に必ず対案書が提出されていた。

各派が代議員獲得のオルグを熱心に行つてゐる中、各クラス、サークルの代議員の政治的関心は極めて高く、議題も大学内の問題よりも“安保粉碎”“三里塚闘争勝利”などの政治問題ばかりで驚かされた。高校の生徒会は代議制で、ましてや政治問題の討論など一切行なわれた事は無かつた。

私もクラスの代議員に選ばれた。資格審査委員から代議員証を貰つて、会場の広い91番教室に入ると、明るい照明の下、中央に演壇があり、左右に執行部の人達が並び、そして、前方にはヘルメットを被つた各派の活動家が陣取つてゐた。

渡された議案書は印刷が悪くて判読不明のところが多く、左翼用語の羅列で内容も良く解らなかつた。今でも、議案書を最初から最後まで読む人はまず居ないだらうと思う。

定められた代議員席に着いて待つてゐたが、8時を過ぎても大会はなかなか開かれず、「大会を早く開け」と民青系の人達からヤジが飛び、会場は騒然とした雰囲気に包まれて、あちらこちらで、民青系と三派系の活動家の揉み合いが始つた。

9時近くになって、執行委員長滝沢君が現れ「現在学内に多量の武器が隠されているという情報が入り、執行部は大会の安全を保障できないので、会場を91番教室から学生会館五階の集会室に移したい。」と発言した。

民青系の人達には、この提案はとても受け入れられるものではなかつた。

学館は三派系の拠点であり、集まつてゐる八百人近い代議員、オブザーバーが入れる広さは無かつた。

滝沢委員長の提案発言を契機にヤジはひとときは大きくなり、会場のあちこちで、両派の殴り合いの小競り合いが激しくなってきた。

このような騒然とした雰囲気の中で、私は緊張よりも初めての経験に物珍しさが先に立つて、ただ、回りをキヨロキヨロ見回すばかりだった。

この日の学生大会は混乱の中に流会となつた。

後で判つたことだが、この時の滝沢発言は完全なデッチ上げであり、学内に多量の武器など隠されていなかつた。

ML派執行部が民青系勢力の増大を目の前にして、学生大会を乗り切る自信

を無くし作為的に学生大会を流会にする手段としてデマ情報を流したのだ。私には政治的なウラなぞ解るはずもなく、学生大会の持つ熱い雰囲気に興奮しながら上江洲さんや野村さん、金子さんと連れ立って家に帰った。

翌日から、学内は更なる興奮に包まれて行った。学生大会が流会になるということは自治会にとって重大な事であり、一般学生の関心も急速に高まり、両派は連日アジ、ビラ合戦を開始した。民青系は代議員、一般学生の署名を集めて6.29に学生大会を開催することを要求していた。三派系は民青系に資格審査委員会への不参加の自己批判を要求していた。三派系の主張は自治会規約の解釈の問題で、自治会運動に参加していない者には解りずらかったが、民青系の要求は一般学生の理解を得やすかった。学外では、6.15の東大安田講堂第一次占拠、日大経済学部前集会など69年全国学園闘争に連なる闘争のさざ波が静かに立ち始めていたが、明大の一時的な学生運動の興奮は東大、日大と本質的に異なっていた。この興奮は自治会権力を巡る一般学生に無関係な党派間の争いであった。その後もセクトの思惑が常に運動の方向を左右してしまうと言う悪しき傾向は明大の学生運動を特徴付けて行った。

学内が学苑会問題で騒然としている中、サークルでは6.28に02番教室で“沖縄問題”的講演会を催した。講師に新崎盛輝氏を招き、日共から借りて来た沖縄の映画を上映した。民青系の組織動員で参会者も百名近くが集った。しかし、動員されて集った参会者というものは各々には全く沖縄問題に対する興味は持っていないので、余り意味はなかった。自治会問題について民青系の主張の宣伝に講演会を利用されたようだ。当時のサークルにはまだサロン的ムードがあり、学内の政治情勢とは別に両派の部員とも一緒に集って、研究会は行われていたし、講演会も一応成功させていた。

- 9 -

6

6月29日、委員長、執行部の過半数の出席が得られないまま、代議員の出席が過半数を超えたたら学生大会に切り替える方向で、民青系は代議員集会を開催した。この日は出席代議員が過半数に満たなかつたので、学生大会には成らなかつた。しかし、百名近い代議員が出席したことは事実であり、学内の情況は日増しに民青系に有利に展開していった。

ML派執行部は7月6日に学生大会を再招集する旨の公示を出した。民青系は公示を不服として再度7月3日に代議員集会を提起していた。7月3日、民青系は91番教室で、二度目の代議員集会を開催した。代議員集会は代議員の過半数を集めて、その場で学生大会に切替えられた。私は学館で、開かれていた研連主催の『学内情勢の説明会』に参加していた。民青系が学生大会を成立させたとの報告が伝えられた時、一瞬会場は静かになり、その場の空気にピーンと一本の糸が走った様な気がして、誰もが目に見え無い何かが動き始めた事を感じ取った。91番教室に行ってみると、三派系の静かな底に或る決意を秘めた空気とは違って、明るい喧騒に包まれていた。議長団が「代議員の過半数の決集を持って、ここに学苑会学生大会を開催する。」と宣言を繰返していた。執行部の多くが不在のまま、反対者のいない学生大会は一種のセレモニーであり、拍手と和氣あいあいの雰囲気で、議事はスムーズに進行していった。現学苑会執行部とブンドの政経学部自治会、解放派の文学部自治会の各執行部の罷免が大会決議として採択され、会場はひときわ大きな拍手に包まれた。明大の民青系の運動がその頂点に達した瞬間だった。

私は或る種の予感に駆られて、学生会館に引返した。記念館の91番教室から学生会館へは明大通りを通って行く。この通りは神

- 10 -

田と水道橋を繋ぐ白山通りを補う道路なので、昼間はかなりの交通量が有り、特に朝夕のラッシュ時には御茶ノ水駅から溢れ出るサラリーマンと学生の群れと車で混雑する。

夜も10時を過ぎると、典型的な都会の夜の顔を現し、人通りは殆ど途絶え、車もタクシーが通るぐらいで、雑踏の消えた通りの両側には明治大学や主婦の友社のビルが黒く沈んでいた。学生会館だけが全館の灯りを光々と点け、戦いを前にした城の如くざわめきだっていた。

学館に近付くと人々は忙しく走り回り、中では戦いの準備が始まっていた。ゲバ棒が準備され、三階のベランダにはコーラや牛乳瓶が並べられ、学館の前の歩道の敷石を剥がす作業が始まっていた。中庭ではヘルメット、ゲバ棒スタイルの二十名ぐらいが集会を行なっていた。

三階の研連事務局に入っていくと、重信さんや今は亡き遠山さんらが忙しく他の大学に応援を求める電話をかけていた。時間は11時頃だったと思うが三階から中庭に戻ると、記念館の方からデモの笛の音が聞えて来た。

集会を行っていた人々も慌ただしく中に戻り、中庭は急に静になった。

マロニエ通りにはまだ一般学生が二百人ぐらいが屯していた。もう誰の目にも戦いが、まさに始まらんとしている事は明白だった。

民青のデモ隊はなかなかやって来なかった。

6. 15の日比谷公園に続いて内ゲバを見るのは非常に悲しかった。話し合えば解り合えるのではないかと一縷の望みを持って中庭に立っていた。その時、学館の中から「お前そんな所で、何をしているんだ。」と声が掛かった。「話し合うべきだ。話し合えば民青だって解るはずだ。」答えたが、何の返事も返ってこなかった。遠くで相変わらず笛の音がピッピッと鳴っていた。戦いの歎車は既に動き始めていた。

暫くすると、暗くて顔はよく見えないがヘルメットを被った男が学館から出て来た。近づくと政研の田村さんだった。「お前の気持ちは分かる。だが、今は中へ入れ。」と私の腕を掴んだ、言われるままに学館に入った。

さっきの声の主は田村さんだったのだろうか？

研連の部屋ではⅡ政自の上原さんが今日の闘いの作戦を説明していた。

- 11 -

「現在学館内の兵力は約百名で、ML派の突撃隊二十名が民青の新執行部を拉致して、自己批判書を書かせる。民青がゲルバートを仕掛けて来たら、他の階は放棄して、三階で防衛戦を戦う。ゲルバートになると室内戦なので、敗けると全員がリンチを受けるから絶対に敗ける訳には行かない。」と言った。その後、伊藤さんの決意表明が始まって間もなく、デモの笛の音が大きくなつて來た。

民青のデモ隊約三百名が大学院の横を曲がって学館のほうへ向ってきた。

デモ隊は学館の前で「学館を明け渡せー！」とシュプレヒコールを始めた。その時、赤と白のモヒカン模様のヘルメットを被ったML派の突撃隊がデモ隊に突込んだ。デモ隊の中にかなりの数の一般学生が混っていたので、彼らを傷付けたくないとの配慮から、ベランダからの投石は行なわれなかつた。指揮者が「石を投げるな。」と怒鳴っていた。

ML派の突撃隊は直ぐにデモ隊に押返されてしまった。民青執行部の拉致作戦は失敗したらしい。突撃隊の後を追うようにデモ隊は学館の中に雪崩込んでいた。突撃隊が三階に戻ると、階段に椅子や机が投込まれ、バリケードが塞がれた。民青のデモ隊は一度学館の中に入るとそのまま攻撃に移らず、再び外に出た。すると、五号館の方から百名ぐらいの黄色のヘルメットで、完全武装した民青の“暁部隊”と呼ばれていたゲルバート部隊が学館に突っ込んで來た。階段へ放水と投石が始つた。時を同じくして、大学院の横から小型トラックが出て来て、デモ隊にヘルメットとゲバ棒を支給し始めた。

最初デモ隊を一度学館に入れたのは一般学生の士氣を高めるための民青の作戦だったのだろう。“暁部隊”は本格的に三階へ攻撃を仕掛けて來た。

ヘルメットを支給されたデモ隊は散開して、一部は11号館に入って学館に向けて投石と放水を開始した。学館の側も三階ベランダから激しい投石が始まつた。

中では三階の階段のバリケードを挟んで、投石、放水、ゲバ棒の闘いが始っていた。石がコンクリートに当たり、水が流れ落ち、ゲバ棒が唸り、悲鳴と罵声が飛び交い、学館は俗に言うデモノイズ、乱闘ノイズに包まれた。

研連の部屋では重信さんが先程から何回も当時ブントの拠点であった中大の

学館に救援を求める電話をかけていた。

救援部隊はやって来なかった。後で判った事だが、中大の学館を出発したブンド救援隊約二十名は民青の阻止線を突破出来なかった。

この日、三派側は民青系の行動を少し甘く見ていたようだ。学館内の人数は百名足らず、しかも大半は明治の活動家で外人部隊は殆どいなかった。反面、顔見知り同士ばかりなので、三派側の士気は高かった。

負傷者も出て来た。私は彼らの血を拭き、黄色い止血の粉薬を振り掛け手当てをした、多くは投石による負傷だった。

曉部隊は三度果敢な攻撃を加えてきた、ゲバ棒の部隊を先頭にして、投石部隊を従え激しい投石の援護で攻撃して来た。三派側も消火栓からの放水とコーラビンとゲバ棒で攻撃を撃退し、階段のバリケードを堅守した。この様な場合、バリケードが突破されたら、守る側の運命は明らかだから必死になる。

12時過ぎ、民青側もついに学館の攻略を諦めて、本館に引上げ学生部で学苑会の承認を求めて学生部長と団体交渉を始めた。

その知らせを聞いて団交を粉碎すべく、学館に立て籠っていた三派側は本館に向けて攻撃に打て出た。ML派を先頭に、解放派、ブンドと続き、この夜の第二ラウンドの戦いが始った。三派側は激しく投石を行い、ML派を中心に突撃を繰り返した。約百名の三派側に対して民青側は約三百名で、守るのには有利であった。当時、投石と棒を主力の武器としていたゲバルトでは建物に立て籠る敵を攻略するのには三倍以上の兵力が必要だと言われていた。三派側は朝まで攻撃を続けたが、空が白み始める頃、民青側に都学連の救援部隊約三十名が駆け付けて来て、三派側に更に多くの負傷者が出了。

6. 29の戦いは朝の5時頃、三派側が学館に引き上げて終りを告げた。

三派系は学館を守り抜いた事は学内政治の場で、大きな力となつた。

それに対して、民青系は活動の拠点を失い“平和と民主主義”“非暴力”的仮面を脱ぎ捨てて、政治党派としての暗い側面を一般学生の前に暴け出してしまつた。

翌日から、三派系は御茶ノ水に非常線を張り、復習のテロが始まった。

その夜のうちに十人程の犠牲者が学館前や学館内でリンチに遭つた。

- 13 -

中には泣き叫ぶ者もいて、かわいそうだなと思うと同時に学生運動の持つ厳しさを見せられた。この様なテロが行われても一般学生の支持は学館を守った三派系に集まり、現実に学館を破壊してしまつた今となっては、民青系の“暴力反対”キャンペーンも色薄い物となつてしまつた。

三派系と民青系の武力衝突はこの時から始り、民青系の“正当防衛論”となり、9月の法政大事件、秋の東大武装対決と血の流れとなって、噴き出して行つた。

5日の夜、サークルの幹事長だった北岡さんが学館前で、ブンドに捕まつてしまつた。

私や上江洲さん、金子さんが駆けつけると、II政自の上原さんらが先頭になつて殴つていた。北岡さんの頬は赤く腫れ上がり、鼻血を出していた。許してやつてほしいと上原さんに頼んだ。

この頃、既に民青のが城であった経研に新しい動きが起こつてゐることを知つていたらしく彼は間もなく北岡さんを解放した。一週間ぐらい後に北岡さんはまた解放派に捕まつてしまい、今度は荻野君らにひどく殴られた。その時、我々は居なかつたので、助けることは出来なかつた。北岡さんと我々は考え方は違つてゐたが、同じサークルの部員としての親近感はどうしようもなく、その後もたびたび三派系がサークル部室に押し掛けて來た時も彼を窓から逃した。

この様な経験から私も個人的感情と政治的行動を分けて考え、また、行うことが出来る様になって行つたと思う。

5日の夜、6日の三派系の学生大会を控えて、再び民青側が襲撃を仕掛け來るという情報が流れた。

私も上江洲さんら経研有志五人と学館防衛の為の泊り込みに参加した。夜半過ぎ、とても五十人足らずの人数では学館を守り切れないとの判断で、中大的学館に移動するという指令が出た。全員が先日の戦いで無惨な姿を晒している一階のロビーに集つた。

中大に正に向かわんとした時、誰かが「学館は我々の物だ。たとえ民青に叩

- 14 -

き出されようが最後まで我々は学館から退くべきでない。」と言出した。全員がその言葉に賛成し、学館に留まることになった。当時から明大の学生運動の中には何処かヤクザばい所が在ったようだ。小雨降るマロニエ通りには、時折、民青のレポ車とパトカーが行き来するだけの長い夜だった。私たちは研連のブンドの指揮下に入っていた。当時、明大Ⅱ部のブンドはその後、赤軍派に行って現在拘留されている上原敦男が指導していた。彼は愛媛の出身で、高校時代はサッカー部に居た親分肌の男だった。その夜いかにも彼の人柄を現す話を聞いた。「資本論、あれは二十五、六才になってカアちゃんを持ってから、ゆっくり読む本だよ。だけど俺も左翼の端くれだから、第一巻だけは持っているんだ。ある時、金が有ったので、全巻買おうとしたけど、三巻分は角ビンに消えてしまったよ。」現在、彼は残り三巻は読んではしまっただろうか。私は一巻も読んでは無い。結局、民青の襲撃は無かった。翌日の学生大会も代議員の過半数を集めて成功のうちに終った。大会決議を持って、民青系のⅡ法、Ⅱ商の各自治会の執行部は罷免された。この時から明大Ⅱ部の民青系の自治会運動は合法性を失ってしまった。

喫茶店“タロー”を部室の延長の談笑の場としてよく利用していた。“タロー”は駿河台下の住友銀行の近くに在り、他の喫茶店が殆どコーヒー一杯百円なのに未だ八十円だった。地下は落ち着いた雰囲気で、特に上江洲さんがお気に入りの店で、よくここで読書をしていた。夏休みに私たちは上江洲さんの案内で、沖縄へ調査旅行に行くことになっていた。沖縄に行くには渡航証明書が必要だった。旅行社に頼むと千五百円程度の手数料で、渡航手続きを一切行ってくれるのだが、自分たちで行うことにして有楽町の東京都海外渡航センターから日本文、英文の書類を取り寄

せて、皆でアーモード無いコーやり合いながらここで作成した。“タロー”の直ぐ裏には末田さんのお気に入りの“アミ”というエレクトロンを演奏する店が在った。コーヒーも飲めたがどちらかというとレストランだった。雰囲気はとても良かったが値段も高いので、時々しか行けなかった。末田さんという先輩は民青の同盟員だったが、新左翼的センスの持ち主で、ゲバートも強く7、3事件の時もゲバ隊の最先頭に立っていた。彼はタンゴやモダンジャズが大好きで、音楽の話をよく“アミ”で、語り合い楽しい時間を過した。

7月10日を過ぎると明治大学は前期の試験に入る。67年の学費の値上げ以後、前期の試験を7月に行い、8、9月を夏休みとする様になった。この夏休み制度を大学当局による学生運動の分断策動だという人もいたが、そこまで考えなくても良いと思う。他の大学と1ヶ月のづれの有る夏休みには一長一短が有った。短所は学生運動のエネルギーが確かに6月末には試験の為失なわれてしまう事、条件の良いデパートの中元セールのアルバイトが出来ない事だろう。長所は夏休み明けに試験が無いので、夏休みがのんびり過せるのと、気候も涼しくなり行楽地も空いてくる9月が休みなのはとても良い事だった。試験の時もサークルとは便利な所で、教科書は先輩のお下がりで間に合うし、マスプロ大学、明大では教授も試験に出す所は毎年同じなので先輩たちが試験の要点を親切に教えてくれた。私にとって次第に授業よりもサークル方が大切な存在になっていった。

試験の終わった7月の終わりに三派全学連は中核派と他派に分裂した。ブンド、解放派、ML派が反帝全学連を創り、結成大会が中大で行なわれた。人事を巡って、ブンドと解放派、ML派が対立し、ブンドが中大の学館に解放派、ML派が明治の学館にそれぞれ陣取って二日間に渡り内ゲバが繰り広げられた。結局、上部でボス交が成立してどうにか反帝全学連の結成に漕ぎ着けることが出来て幕となった。

御茶ノ水には大きな学生運動の拠点が二ヵ所に在った。

一つは明治の学生会館で、もう一つが中央大学の学生会館だった。

明治の学館がキャンバスの中心に在るのに對して、中大の学館は小川町の交差点寄りに在り、キャンバスから道路を一つ隔て回りを民家に取り囲まれていた。立地条件は早大の新学館と似ていた。中大の学館の特長は管理運営権を完全に学生が握っていて、予算も学生が管理していた。明治では運営権は学生が持っていたが管理権は大学が握っていた。例えばガラスが破れた場合、中大では学館委員会がガラス屋を呼んで直すが、明大では学館委員会が書類を大学に提出して大学がガラス屋を呼んで直すといった具合であった。

同志社大の学館と並んで日本で一番学生の管理運営権の強い学生会館だと言われていた。設計の段階から学生の意見が取り入れられて建てられたらしく、その時の活動家がそこまで考えていたかどうかは分からぬが、外観はまるで城の様にびんぐりしていて、出入口は二ヵ所にしかもなく、窓も小さく、ベランダは外側に傾斜が付いていて、ゲバルトの時には非常に守りやすく攻めにくい建物だった。

城のようなびんぐりとした建物は愛着の感じる建物であったが、69年以来、依然、大学当局の手によって閉鎖されたままである。

8月に入ると、駿台祭の発表テーマ“沖縄”的研究会が頻繁に開かれて、サークルは活気を呈していた。

一学期中は研究会も余り活発ではなかったが、沖縄への調査旅行も控えていた夏休みに入ると共に研究会も急速に盛上がって来た。

この頃からサークル内の民青系と三派系の色分もはっきりして来た。

この色分、対立はその後益々深まって行くのだが、我々は政治組織では無くサークルなので、沖縄問題を媒体にして論争を行っていた。

8月24日から2週間、私たちは沖縄本島に調査旅行に出かけた。

この旅行で三派系のメンバーは民青=日共の掲げる“全面完全復帰”論の理論的虚弱性を感じ、その思いを益々深めて行った。

調査旅行から戻ると9月、10月にかけて各々の研究テーマを整理すると共に経済研究部の沖縄問題に対する結論をどう表現するかについて、何度も民青系の人達との討論を行なった。討論の中で、我々と彼等の考え方、沖縄問題への関わり方の違いが鮮明になって行った。

私たちは沖縄の特殊な場所的状況を日米両帝国主義国家の東南アジア諸国への経済的進出の後盾としての軍事基地と捕らえていた。更に我々にとっての沖縄問題という観点に立つとき、その頃、文化人の間で“加害者意識”なる言葉が流行していたが、我々に“加害者意識”なる感覚は全然無かった。太平洋戦争が戦われた時には生まれて居なかつたし、加害者などと自ら一步離れた立場で、沖縄を捕らえるのではなく、むしろ自らの変革、解放の過程として沖縄を捕らえるという感覚だった。だから、民青系の“全面完全復帰”なるスローガンは沖縄現地の人々のものであり、我々にとって自らの解放が沖縄の解放に繋ると考えていた。

常に自己の場を変革していくことが眞の革命に向かうと考えていた。

民青系と我々の最大の争点は日本の帝国主義の規定のし方だった。

現在日本はすでに帝国主義段階入っており、当然、沖縄問題も日帝打倒=反帝闘争の一環として捕えるべきだと考えていた。

それに対して、民青系は現在日本は未だ国家独占資本の段階にあって、依然、対米従属路線を取っているので、反米統一戦線を創る必要があると主張した。しかし、彼等の主張では始まり出した日米経済戦争を旨く説明できなかった。民青系の人達にその点を強調して論争を挑んだ。

最終的な討論会が行われたのは駿台祭の一日前の夜という時間的にもギリギリの所だった。

この夜、民青側の最強の論客、中上さんが欠席するという幸運にも恵まれて論争に勝った。この間の論争を通して、我々は民青系の人達に対する理論的劣等感から脱却して、むしろ理論的優越性を持つ様になっていた。

駿台祭の沖縄問題の展示、研究発表で「日帝打倒=反帝闘争の一環として、

沖縄問題の解決は計られるべきだ。」との結論を経済研究部の見解として発表した。

この年の駿台祭の実行委員会テーマは“疑制の終焉”だった。

明治大学はキャンパスが御茶ノ水、和泉、生田と分かれていたので、各々に学園祭は有るが、やはり本部キャンバスがある御茶ノ水の駿台祭が盛大だった。駿台祭は我々サークル部員には年に一度の研究発表の機会であり、また学生運動の活動家には『戦士の休息日』でもあった。

各々のサークル展示、研究発表だけでなく、政治問題のシンポジウム、映画会、模擬店、唐十朗のテント劇場の上演など楽しい催物が盛り沢山で学内は終日賑っていた。

この時ばかりは活動家と呼ばれる人々も各自治会が出している模擬店のウェイターやウェイトレスに早変わりして、祭りを楽しんでいた様だった。

学館地下の喫茶店では遠山さんがスカート姿で、ウェートレスをやっていた。私は初めて遠山さんのスカート姿を見たので「遠山さんもスカートを履んでですか。」とからかうと、「私ダッテ、女の子デスヨーン。」と笑っていた。彼女はとても女らしく美しかった。

我々経済研究部の展示室は11号館の地下のゼミ室で、室内は壁一面に研究の成果が書き込まれた模造紙が張り詰められ、訪れる人には研究のレポートが配布された。

各サークルの展示室には必ずと言っていいほど酒があり、夜も9時を過ぎて展示が終わると各部屋で酒盛りが始まり、酒を片手に相互訪問して朝まで騒いた。政研や歴研とはお互い研究分野が社会科学である事、部室が同じモグラ横町にあった事、三サークル共に新左翼のシンパサイダー的存在であった事などで、特に親しかった。経研には未だ民青系の人達も数多く居たが、7.3事件の頃から、我々は既に三派系シンパと見られていた。

この年の駿台祭は夏の三派全学連の分裂から、秋の10.8、10.21闘争と一連の街頭実力闘争を果敢に戦って、空前の新左翼系学生運動の高揚

- 19 -

期に開催されたので、非常な盛り上がりを見せていた。

私はサークルの展示室で、訪れる人に我々の沖縄問題の考え方を説明していたので、余り他の催し物を見ることは出来なかったが、祭りに直接参加しているという喜びを感じていた。

当時、新左翼諸派は沖縄問題に関して、まだ本格的な取組をしておらず、日共の『祖国全面復帰』が多く研究の場で主流となっていた。

我々が打ち出した『帝国主義本国の解放と沖縄の解放は一体である！』と言う考え方は訪れる人の注目を集めた。この結論はサークルに沖縄出身の上江洲さんがいて、彼自身の二十数年に渡る生活実感から導き出されていたところに強みが有ったようだ。

当番で展示室に残っていると、一人の学生が入って来て、熱心に展示を見ていた。彼は見終わって私に「沖縄問題を反帝闘争の一環として捕えるという見解は新しい考え方で、私も正しいと思う。」と言った。話してみると政研の林君と同じクラスで、名前を賀茂と名乗った。サークルについて説明すると興味を持って、サークルに入りたいと言った。部室の場所を教えて、駿台祭が終わったら是非来てくれるよう頼んで別れた。

野村さんなどはオルグが上手で多くの人をサークルに引張って来ていたが、私は元来オルグが苦手で、後にも先にもサークルに勧誘出来たのは彼だけだった。

最終日の夜、久し振りに皆で、神保町スズラン通りの三省堂の向い側ある居酒屋“ニューアサクサ”に繰り出した。安さだけが取り柄だったが、十分楽しめる店だった。

店は駿台祭を終えた明大の色々なグループで、賑わっていた。

この夜、私たちは駿台祭を無事終え、民青系との論争にも一応の決着がついたので、皆の顔も明るかった。

御茶ノ水の街も終夜明かるく、賑かだった。

私たちは民青系の人たちと一緒にサークルの運営は不可能であるという結論に達し、彼等と分裂することになった。

今から振り返ると、その頃やっと、私たちも自他共に認める新左翼系学生運動の活動家に成りつつあった。

民青系の人々は7.3事件以来大学には来ずらしい状況で、実質的なサークルの運営は我々が行っていた。彼等を追い出すのは簡単な事だったが、私たちは民主主義のルールに沿って、総会の決議を持って彼等を退部させることにした。だが、困った事には普段部室に来てサークルの活動を担っているのは我々なのだが、いざ、総会となると彼等が数の上では圧倒的に勝っていた。

前日、総会をどう乗り切るか協議したが、なかなか結論は出なかった。

明日は、中上、中塚といった四年生の論客が必ず民青の先鋒になって来るだろう。そうなると、彼らは理窟家、野村、金子両氏が頑張っても討論に勝てないかもしれない。

議論は堂々巡りを始め、時間も遅くなつたので、一応、部室での討議を打ち切り場所を新宿の喫茶店に移して、上江洲さんを中心に岡田、金子、佐藤、私とで、最終的に投票になった場合の票読みを始めた。

票読みとは仮定、仮説の連続を予想する事で、作業としては実に愉快なものだった。最後には一人一人の名前を挙げて、彼は我々側だ、いや、民青側だと喧々ガクガクだった。そこから引き出された結論は中間派をどうにか我々側に引き付ければ勝てるだろうと言う事だった。

空も白みかけた5時頃、喫茶店を出ようとレシートを見ると、深夜料金とかで、コーヒーとサンドイッチで、一人七百円も付いている。全員の財布を空にしても足りない。上江洲さんに目白の下宿まで金を取りに行ってもらつて、どうにか店を出られたが、我々は皆貧しかった。しかし、ボロは着てて

も心は錦の心境でサークルの事を考えていればそれだけで楽しく、特に今日は民青との対決を控えて尚更だった。

朝の新宿は街角にゴミが積み上げられ、汚物が道の端に散んで汚かった。ここが2ヵ月前に大闘争の舞台になった同じ街だとはとても思えなかつた。やっぱり、新宿の街を歩くのは夜に限る。

5時前に部室に行くと、誰も来てなかつた。

民青系との長い闘いが今日で終わるのかと思うと、私の胸は高鳴り、昨日と何も変わらない部室が別の部屋に見えた。

民青系の人達も個人的には真面目で、好感の持てる人が多かつたが、政治的な意見の違いはどうする事もできなかつた。

5時過ぎ、上江洲、野村、金子、岡田、佐藤と仲間が次々にやって來た。

皆それぞれに興奮の様子は隠せなかつたが、野村さんなどが少し冗談を言う程度で、何時に無く静かな部室だった。

6時頃、岡部、新井さんなどの中間派の人々がやって來た。

今日の事態に一番当惑を覚えていたのは彼らで、暴力に対して本能的な嫌悪感を持っていた。岡部さんなどは本当に困った様子だった。

社会変革のエネルギーが市民社会の持つ保守性を破壊する時、暴力は必然的に行使せざるを得ないという事を彼らに理解してもらう事は難しかつた。

上江洲部長が臨時総会の開会を宣言して、総会は始まつた。

民青系の人達は誰も現れず、昨日、夜を明かして想像していた状況はこんな筈では無かつた。我々は妙にシラケてしまつた。或る種の落胆、やり切れなさを感じていた。一度は彼等と真正面から論争をしなければ、先に進んで行けないと考えていた。その時、彼等はドカドカと二十人を越える大人数でやって來た。

多くは学内の民青の政治集会ではよく見掛けるが、部室では見た事の無い顔だった。彼等のよく使う手口で、民主主義のルール、多数決のルールに乗っ取った名前だけの部員、しかし、今はその汚らしい手に大きな一票を握り締めた実在の部員だった。

議題は7月からの学内諸情勢と駿台祭での沖縄問題の結論と今後のサークル運営に関してで、この流れに沿って彼等を窮屈に追い込んで行く作戦だった。金子、野村両氏が問題提起を始めた。学内情勢に関しては一方の当事者である彼等の方が一枚も二枚も上手で、この間の事情に精通していた。

中上、中塙という論客もいて、我々は不利だった。

民青が学館を襲撃した。この一点に主張を絞って、我々は論陣を張った。

対する彼等は6月18日の学生大会流会の件を持ち出して、論点はなかなか噛み合わなかった。

室内は皆の吐き出すタバコの煙りが漂い、裸電球が虚ろな感じで時間だけが流れていった。

議論が噛み合わない。

確かに、一つ物事の現象を捕らえて話し合いが行われているのだが、その後ろには双方を支えている政治勢力が在るのだから仕方がない。彼等も我々も仮に論争に敗れたとしても引き下がる訳には行かなかった。

議論が行き詰まってしまった時、民青の活動家としては名前を知られた女性だが、部室では一度も顔を見た事は無かった山中さんが例によって民青の得意な多数決の論理を持ち出した。

「幾ら話し合っても結論が出ないのなら、ここで多数決を問うたらどうか。」私は怒りで頭に血が上る想いで、発言を求めた。

「サークルは運営していく意思を持った者の総意で運営するべきで、一度もサークル活動に参加して無い幽霊部員は口を挟む権利は無いし、ましてや、一票を投げる資格は無い。」

今から振り返ると、発言というよりも相手を口汚く罵っただけなのだけれど、この種の発言は討論が行き詰まり、双方が理論的、思想的に妥協するつもりの無い時には時として大きな効果を發揮する。

それは議論を思想以前のサークル運営の資格に問題をすり換えた。

一瞬、北岡さんの顔に困惑が走った。

この瞬間、我々は民青に勝った。

民青系の人々はサークルを去って行った。

- 23 -

明大内部で経済研究部は新左翼系無党派サークルとして再出発した。とりわけ、サークルの上部団体、研連執行部を握っていたブンドは喜んだ。話を聞いて、委員長の小宮さん、II政自の上原、重信、今は亡き遠山さん達が特に喜んでくれた。

10

私は次第に授業よりも専らサークルの部室に居る事が多くなって行った。今日、多くの私大の授業がそうである様に、明大の授業もマスプロで、経済学科にとっては基本的で重要な経済学原論などは一度に四百人も入る大教室で、マイクを使った授業で、内容も担当教授が書いた教科書をタダ読んでいるというお粗末さだった。

これでは連続の講演会を聞いているのと同じだった。

学外では10.21を全面的に勝利したと総括した新左翼各派は69年反安保闘争に向けて、活発な動きを見せていた。

当面の大きな闘争としては夏から始まっていた東大、日大両大学闘争が在り、この両大学闘争がその後一年に渡る学生運動の時代を引っ張って行った。

東大では全共闘が安田講堂の占拠に踏み切り、日大では夏の大衆団交を経て、全学のバリケード封鎖に突入していた。むしろ明大など昔から学生運動の主力を担って来た都内の主要大学が未だに闘争に入れ無いのが不思議に思えた。この時期、未だ明大には全学へ波及するだけのエネルギーを内抱し得る個別問題が無かった。

集会は連日の様に開かれたが、今一步、一步足りなかった。

我々の気持ちも期待と苛立ちが織り混ざった状態だった。

我々は何よりも6ヶ月続いた民青系との論争で、エネルギーは蓄積されていたから、これら学外の状況に対しても鋭敏だった。

- 24 -

民青系部員を退部させたのを機会に経済研究部は明確にマルクス主義を打ち出す為に名称をマルクス主義経済研究部に改称した。

社会科学のサークルでは政治研究部、歴史研究部がモグラ横町では新左翼系だった。今まで経研は民青系サークルという事で個人家来な付き合いは有ったが、サークル同士の交流は無かった。我々は政研、歴研に三サークルの連絡協議会を作ろうと呼び掛けた。その結果、三サークル持ち回りによる講演会の開催が決まり、学外の諸闘争にも共同で取り組む事が模索されました。この協議会を作るのにマル研の金子さん、政研の小島君らが精力的に動き、成功に導いて行った。

12月中旬、第一回目の講演会が政研の主催で、政研のOBを講師に招いて開催された。

三サークルの共闘関係はその後大きな力と成って、明大闘争を支えて行く事になるが、今は未だ朋芽であり、私たち自身、その行く末を知る由もなかった。

この頃になると、学内新左翼各派も我々を注目し始めた。特に、サークルの上部団体、研連を握っていたブンドは友好的に働き掛けで来た。

私も上原、小宮、重信、遠山、三井、田村、安田さんら多くの人々と親交を深めて行った。

御茶ノ水の街は活気に満ちた日々が続いていた。

日本の学生運動の起爆エネルギーと成った東大、日大両校が歩いても20分位の所に在り、また、学生が運営権を握っていた明治の学館は各党派の拠点になっていた。

御茶ノ水の駅を降りると毎日アジテーションが聞こえ、それが既に街の音を構成する一つの音色となって、他の街とは異なった音色を御茶ノ水の街の喧騒は醸し出していた。

- 25 -

11

11月23日、明大周辺はざわめき立っていた。

この日より少し前、東大、日大両全共闘は共闘関係に入り、この日の両全共闘主催の集会を以て、東大の全学封鎖に踏み切るという噂だった。

この動きに対して、全共闘と対立していた民青系全学連は封鎖に反対して、全国動員を掛けている。新左翼各派も全国動員を掛け、双方二万人、計四万人の学生が東大に集まると予想されていた。

7月の明大学館襲撃、9月の法政事件と民青側の正当防衛なるゲバルト路線も定着して来て、大きなゲバルトは避けられないと思っていた。

星過ぎから、各派の活動家が続々と集まり、夕方にはその数も僅に千人を越え、明大通りでは日大や中大の部隊がデモを繰り返して気勢を上げていた。

この日の戦いが全国大学闘争の天王山であり、全共闘の総力を以て、一挙に民青を粉碎し、69年反安保闘争へと続く戦いの大きな前進の一歩にしようと言う内容のアジテーションが繰り返されていた。

6時頃、大学に着くと新左翼系は11号館、学館前で、民青系は7号館前で、それぞれ個別に集会を持ち、お互いに相手を激しく攻撃していた。

今振り返って、不思議に思うのは、7月の明大、9月の法大と両派はゲバルト戦って来たが、この日マロニエ通りを挟んだ二十メートル位の距離で、お互いに集会を持ちつつもゲバルトにならなかった事だ。それだけに東大闘争が単に個別東大の問題ではなく学生運動の頂点に立つ闘争だと、一人一人の胸に位置付けられ、今夜こそ本郷キャンパスで、決着を付けてやろうと思っていたのだろう。

まずは部室に急いだ。上江洲、野村、金子さんらが既に来ていて、タバコの煙りがモウモウと立ち込め、思い詰めたい訳ではないが、明るさを伴った緊張感があった。我々マル研有志はその日の状況などを話し合った後、集会

- 26 -

場に急いだ。

この時は未だ、サークルとして政治行動を取れるまでに我々は純化していなかった。はっきりと民青系と思われる人達は既にサークルを去ったが、三派系とも民青系とも割り切れずに居た岡部、島田さんといった多くの優秀な人たちがサークルには残っていたが、東大闘争が激しくなるこの頃、彼らも自然にサークルから遠ざかって行った。彼らとは十分な討論を交える事も無いまま、我々も自分たちの方向に突き進んで行った。

三派系の学館前の集会に向かう途中、7号館の前に差し掛かると、つい1ヶ月前まで、同じサークル部員として共に活動して來た北岡、末田さんなど民青系の人達がいた。お互いに顔が会うと複雑な笑みが走り、これが闘争の現実なんだなと思った。

ここでは友人として顔を合わせても、1~2時間後、東大で会えば個人的には何の恨みも無いが敵として戦わなければならない。もし、東大で北岡さんに遭ったら、彼らを打ちのめす事ができるだろうか、自問してみたが思考は中断した。その先を考える事は私には辛かった。これが政治の現実なのだと自分に言い聞かせていた。

『政治の現実』この頃の私には思考を中断させるのに都合の良い言葉だった。

学館前に着くと、集会は終りに近く「東大闘争に勝利するゾー！」「民青を粉砕するゾー！」とシュプレヒコールを叫び、インターナショナルを歌って、御茶ノ水駅に向かってデモを始めた。

上江洲、野村さんと私はML派のヘルメットを借りて、隊列に加わった。

金子さんたちはブンドの隊列に入った。御茶ノ水駅に着くと民青が明治の学館を襲撃するという情報が伝えられML派は学館に引き返すことになった。私たちは学館に引き返しても仕方がないので、東大に行こうと話し合っていると、ブンドの人が来て「東大に行くのならキップをやるよ。」と言って、地下鉄のキップをくれた。

本郷三丁目の駅に着くと東大全共闘から案内の人達が來ていて、東大構内の現在の状況が説明された。機動隊が既に東大を包囲しているし、今日は機動隊

- 27 -

と戦うのが目的ではないので、デモの隊列は組まず、三々五々散歩の様に歩道を歩いて構内に向かって欲しいと注意があった。

皆の間からは「フーン。」と一瞬、照れた笑いが漏れた。

我々は大きな声でインターナショナルを歌いながら東大構内へ向かった。

街の辻々には多くの野次馬と機動隊と全共闘、民青双方のレポが立ち、パトカーがけたましくサイレンを鳴して、付近一帯は騒然としていた。

赤門の近くに差し掛かると、赤門を守っていた民青のゲバ隊がヤジを飛ばして來た。我々も何か言い返したが、そのままやり過して、正門から構内に入つて行つた。あちこちで、集会が始まつていて大小様々なデモ隊がデモを繰り返していた。

安田講堂前の広場はいっぱい、各党派ごとに全体集会が行われていた。

明大II部として一緒に來たブンドと青解も各々の党派に別れる事になった。私たちはこのままブンドの所に残ろうと思っていると、教研の水戸さんが青解の所に行こうと誘ってくれた。

上江洲さんが「それじゃあ青解に行くか。」と言いつたので、私も付いて行つた。金子さんなどはブンドが良いと言うので、安田講堂の前で別れた。まあ、当時の私たちの党派に対する考え方や感じ方はこんな所だった。

ブンドにヘルメットを返して、青解の所に向かつたが、どうせ、急いで集会に出る事もないし、後のゲバルトの時の為にも構内の様子を見ておいた方が良いという事で、図書館から教育学部、三四郎池を通つて医学部の方へと構内を歩き回つた。様々なデモ隊と野次馬が至る所に集まつていて、東大構内全体が沸き返つていた。

教育学部の近くに行くと民青の方も焚き火を炊いて、盛んにアジテーションを行つて氣勢を上げていた。余り近付くのは危険なので、医学部の方を回つて安田講堂前の広場に戻つた。途中、革マル派の大きなデモ隊に会つて、五十人ほどの女性ばかりのゲバ隊がいて驚かされた。「美人はいるかなア。」などと冗談を言いながら見送つて、青解の集まつてゐる所に戻つた。

当時、明大の青解は仁侠路線ということで、赤旗にサイクロのマークが縫い付けてあった。その旗は非常に目立ち、何処の集会でも直ぐに見付けること

ができた。

ヘルメットを被りゲバ棒を手にするとサーと緊張感が走り、嫌でも私たちの置かれている立場とこれから始まろうとしている事が思い知らされた。

30分程で集会は終り、構内をアッチコッチとデモ行進した。

明大の部隊は突撃隊の直ぐ後ろの遊撃隊に編入された。青解の作戦は図書館方面から赤門へ突出するという事だった。図書館の横に着くと、腰を下ろして、また集会が始まった。柵を一つ隔てた向こうには本郷通りが走り、平和な日常が有るというのに、ここは別世界、奇妙な違和感を感じながらも、これから始まるであろう激しいゲバルトを想像すると武者震いが走った。

1時間近くも1月末の夜の路上に腰を下ろしているとさすがに寒い。

古風な図書館の暗く大きな建物が不気味に迫って来る。この不気味さが今日の大学制度そのものなのだと考えながらも、やはり、通り一つ隔てた街の灯が暖かく感じられた。

「医学部本館へ退く。」と指揮者が言って、再びデモに移った。

その時、張り詰めていたものがフューと引いていく様な気がした。同時に先程まで何か暖かく感じられた街の灯も、我々を遠くから敵意を抱いて見詰めている様な気がして来た。

私はより大きな声で、シュプレヒコールを叫びながらデモに移った。

明大の部隊は医学部本館に着くと医学部長室に入った。

広い部屋が三つもあり、床には赤い厚い絨毯が引き詰められ、ガスストーブも有った。我々は床に座り込んで暖まることができた。今まで寒い戸外で、立ち続けて暖かい部屋に入って、一息入れると急に空腹感を覚えた。

6時頃、夕食を食べたきりで、あっちこっち動き回っていたのだから無理もない。誰からともなく「何か食い物は無いかなア。」と声が上り、棚などを探してみると、出てくるわ、出てくるわ、紅茶、コーヒー、クッキー、見た事も無い高級ウィスキー。

「大学という所は不思議に何でも有る所だなア。」と妙に感心してしまった。クッキーを片手にウィスキー入り紅茶で心身共に暖まり、皆で談笑していると、「集会が始まるので大教室に集合しろ。」と命令が来た。「やれやれ、

- 29 -

やっと暖まったのに集会ばっかりだ。」などと言いながら大教室に行くと、既に、多くの部隊が集まっていた。

沢山の旗が並び、ブルーのヘルメットが講堂の蛍光灯に鈍く光っていた。

「東大全共闘と共に日本の学生運動の新たな地平を切り開くべく、多くの諸君が決集しているこの時に安田講堂では東大全共闘と各党派間で、方針の違いが出て、現在揉めている。既に、東大に拠点を持ってない中核派、ML派、日大全共闘は日大に引き上げてしまい、革マル派、フロントは民青との戦いを中止するとの指令を出しました。残るブンドと我解放派は断固戦う方針だが、如何せんこの二派、二千人の兵力では到底一万人の民青に打ち勝つ事はできないので、今日はこの医学部本館を断固防衛する。」と指揮者が報告した。

私は報告を聞くと、ホットすると同時にシラけてしまった。

棒剣術の講義の後、一人に付き食パン一枚とあんパン一個の食事が配られた。空腹だったので、とても旨かった。

集会が終わって医学部長室に戻ると、東大全共闘の人がやって来て「ここは封鎖中だから入ってはいけない。」と言った。

私はバリケードの中では諸個人の関係と組織維持の上で、最低限の秩序が保たれていれば良いと思っていたし、我々が封鎖の当事者なのだから入っても構わないと思っていた。あの高級ウィスキーをまた飲みたかったし、フカフカした絨毯の上で寝たかったが、やはり、東大にはバリケードの中のも一種の秩序が有った。我々は仕方なく元の大教室に戻った。

我々遊撃隊は三階ベランダの見張りに付いた。

夜になると、時々民青のゲバ隊が挑発デモを仕掛けて来たが、その都度、地下室から運び上げたコークスを投げて追い払った。

3時を過ぎるとさすがに寒く、民青の陣地で炊かれている焚き火や遠くに見える街のネオンの灯がやけに暖かそうに見えた。そのうちに段々眠くなり床に蹲って眠ってしまった。誰かが来て「僕はもう寝たから、今度は君が寝よう。」と言って、毛布を掛けてくれた。

私は嬉しかった。

- 30 -

12月に入るとマロニエの葉もすっかり散り、通りに夕日が落ちるのも益々早くなった。

東大や日大を巡る情勢は日増しに緊迫し、明大の学館前では連日様に集会が行われていた。

学内は冬休みを控えて休講が多くなり、アルバイトや帰省する者も増えてきて、学生の数は少なくなつて行つたが、私たちは発足したばかりの三サークル協議会を盛り上げるべく、毎日のように政研、歴研の人達と話し合いを持ち、また、講演会の準備に忙しかった。

当時のマル研の主なメンバーは、私の外、上江洲、野村、金子、奥山、樺沢、新井さん、沢部君、そして、駿台祭で我々の研究を見て入部してきた賀茂君だった。

民青系の人達との訣別いう内部問題を解決し終えた我々は新左翼系サークルとして、自らの理論的水準を高めるために“賃労働と資本”などをテキストにして、部室や小さな教室を借りたり、また、時には“タロー”など喫茶店で、精力的に学習会を行つた。学習会の方法は毎週のレポーターを決めて、レポーターが各章づつ内容を自分なりに解釈して報告し、それに対して他のメンバーが質問をしたり、批判を加えたりしながら進めて行つた。

三サークル協議会や学習会を通じて、マル研は新左翼系サークルとしての結束を益々強めていった。

68年は騒々しくも、私にとっては確かな実在感を持って暮ていった。

12

正月は家でゴロゴロして“白鳥”的友人を訪ねては酒を飲んでいた。

私は“白鳥”という喫茶店に入り浸っていた。その店は池袋の文芸座のはす向かいに在つて、クラシックのレコード喫茶で、店内は薄暗くコーヒーが一杯百二十円だった。この店の特徴はコーヒー一杯で、何時間でも居られる事

- 21 -

で、本を読んだり、知り合った友人たちと雑談をして過ごした。

この店のもう一つの特徴は知らない者同士が学生運動の話題をきっかけに直ぐに友人になつてしまふことで、学生運動の話をしていると、「私も話してもいいですか。」などと言いながら、見知らぬ人が話に入り込み、そのうちに友人になつてしまふということが度々在つた。

この内の何人かとは変わらぬ友情を現在まで持ち続けている。

楽しい正月休みを過ごして、お屠蘇気分のまま登校すると、帰省しなかつた上江洲さんや金子さんたちは正月中も登校していて、部室はお屠蘇気分がそぐわない熱い雰囲気に包まれていた。

東大闘争は半年を経過し、主要学部はすでにバリケード封鎖されていた。

2月の入試、3月の卒業を控えて大学当局も決断を迫られていた。

情勢は急速に緊迫の度を増していた。

1月9日、研連のブンドから、再度、全共闘が教育学部の民青を排除して全学封鎖に入る所以、我々にも参加してほしいと要請が来た。11.23の様な全国動員ではなかったが、それでも三千人ぐらいの各派の部隊とそれに倍する野次馬が集まっていた。

本郷に着くと集会は終りに近く、直ぐに安田講堂前からデモに移り、教育学部のある建物の前に行くと中核派を先頭とした部隊が既に建物の中に突入していく、ドンパチのゲバルトが始まっていた。その時、建物の屋上の方で、パンパンと物が破裂する音が聞こえた。一瞬、爆弾が出たのかと恐怖を感じた。この頃になると空想と現実の間のモヤモヤした形ではあったが、火炎ビンや爆弾も我々の認識の中に存在し始めていた。後で聞くと、この時はどうやら民青が爆竹を投げたらしい。

前後して、図書館のほうから別の喚声が上がり、そちらから、デモ隊や野次馬の学生たちが雪崩を打ったように逃げて來た。てっきり民青の別部隊が反撃してきたのかと思ったが、機動隊だった。我々も学生たちと一緒に三四郎池まで逃げてしまつた。その結果、建物の中に入っていた中核派の部隊を置いてきぼりにしたわけで、彼らは民青と機動隊の挟み撃ちに会い、酷くやら

- 22 -

れてしまった。この夜の機動隊は学内に止まらず直ぐに学外へ引き上げたが、東大にもとうとう機動隊が入ったかの感を強く感じた。
東大全共闘の教育学部封鎖は失敗した。

東大闘争は15日の労学総決起集会から、18、19日の安田講堂の戦いへと突き進んでいった。

18日朝、安田講堂と外部で、戦いは始まった。
明大と中大には続々と各セクトやノンセクトの部隊が集まり、交通が遮断された明大通りはデモ隊が溢れていた。
皆口々に「東大へ行こう!」、「東大へ行こう!」「安田講堂で戦っている同志と合流して、機動隊を殲滅するぞ!」と叫んでいた。
昼過ぎから戦いは激しくなり、明大通りから順天堂病院の方へとセクトの部隊を先頭に突き進んだ。御茶ノ水橋を過ぎて順天堂病院前まで行くと、機動隊は装甲車を並べて強力な阻止線を張り、放水と投石と催涙弾の水平打ちで、デモ隊の進出を阻止した。辺り一帯は催涙ガスが白く立ち込め、デモ隊の上には放水車からの放水が滝のよう降り注ぎ、目を泣き腫らし、ずぶ濡れになりながら、何度も、何度も、投石を繰り返し阻止線の突破を試みたが、機動隊の壁は厚かった。明大の学館内には作戦指令部が置かれ、ラウンドスピーカーが「東大の同志と合流し、東大を解放せよ!」としきりに叫んでいた。
そのうちに、革マル派の部隊が攻撃を止めてしまい御茶ノ水橋にバリケードを築き始めた。「ここいらが、潮時だな。」と引き上げると、部室にも催涙ガスが流れ込み、皆、目を赤く腫らしていたが、全員無事だった。
東大と順天堂病院との間は約一キロの距離しかなかったのだから、もっと頑張るべきだった。11月23日といい、この日といい、党派は何故、全面闘争を組まなかつたのだろうか。
安田講堂で戦い、後日友人となった池田君は「内では御茶ノ水からの救援部隊が来ると信じていた。」と私に語った事が有った。18日、19日は安田講堂では歴史に残る闘いとして戦われたが、御茶ノ水では只単に解放区を創

- 23 -

って終わり、安田講堂の同志を救出するという本来の目的は果たせなかつた。
しかし、我々には敗北感は無く、この時点ではむしろ勝利したと感じていた。

1月から2月へと東大闘争の残務処理的闘争は依然として組まれていたが、それらの戦いには直接的に関わる事は無く、元の学習会活動と三サークル結合に向けた運動を構築して行った。

13

1月の下旬に、期末試験が始まった。
二学期からは殆ど授業に出ていなかった。語学の試験は駄目だったが、経済原論などの専門課程の試験はサークルの先輩達と毎年同じ問題を作ってくれる怠慢な教授達のお陰で良く出来た。

試験が終わると4月までは春休みだ。この期間は学生運動も休みだった。
2月中旬、久し振りに東京に雪が降った。部室で雑談をしていると、誰が言い出すでもなく雪合戦をやろうという事になり、それじゃと、早速、政研、歴研の連中も誘って裏の錦華公園に繰出した。ヘルメットを被りワーウー言って、雪合戦に打ち興じていると、通りがかりの小母さんが「今時の学生は何だろうねエー。」と非難がましく言って行くのが聞こえた。
そんな言葉も気になら無い程、我々は元気だった。
雪だけが降り続くとても静かな御茶ノ水の夜だった。

3月に入ると、一般学生が未だ登校しないので、教室部分の校舎は静かだったが、学生会館や4号館、モグラ横町は新年度の活動方針を打ち立てるための各種のフラクション活動や新入生の受け入れ準備が始まり、次第に活気づいて来た。

連日、マル研も今年度の主要活動方針を打ち出すための討論を行っていた。

民青との一年間に渡る内部闘争に勝った今、理論と実践を行い得る機動性を持ったサークルに変貌し、大学立法粉碎闘争、秋に予定されている反安保闘争を主体性を持って戦う事が確認された。
今年の新入生獲得は量より質を重視して行こうということになった。
6・9年という年が、厳しい、大変な一年になる事は誰もが感じていた。
サークルの質を高めて行く為にも“戦うサークル”である事を全面に打ち出し、その事を了解出来る人だけを入れる事で、皆の意見はまとまつた。
(この様に書いてしまうと私がこのサークルに入った、きっかけには少々引っ掛かりを覚えるが。)

4月に入ると、入学式、新入生歓迎集会、本館中庭出店と新入生獲得の為の様々な行事が始まった。
本館中庭では各サークルが飾り付けた立看や机や椅子で、思考を凝らした出店を作り新入生の獲得に励んだ。人気があるのはウォーキング部、空手部、柔道部、自動車部、電気研、文学研などスポーツや趣味に関係の有るサークルで、マル研、政研、歴研といったマルクス主義や学生運動のことを前面に出しているサークルは人気が無かった。
明大通りは一見して、それと判る新入生の姿が目立ち、一年前は彼等と同じだったんだなあと思うと、私も照れ臭さと甘い気分を同時に感じた。
この時期は秋の駒台祭と並ぶ祭りの季節であり、キャンパスは新鮮な輝きと熱気をはらんで美しかった。
新入生獲得のほうは、例年の経験からすると、十人から二十人入部はするが、残るのは四、五人といった所だった。今年は予想通りか、希望通りだったかは別にして、入部の前に十分にマル研の実情を説明し、今後の方針を伝えたので、人数は小数でも質の高い、その後の我々の運動を支えて行った主要な人々、小杉、高橋、富樫君、荒井さんなどが入部して来た。
新入生歓迎コンパなどの行事を終えると、早速、彼らと共に4月下旬に予定されている三サークル主催のマル研の講演会と4・28沖縄返還闘争の取組という新たな運動に入って行った。

- 25 -

4月下旬、三サークル主催の連続講演会をマル研が行う時が来た。
友人の小野田さんに講演を依頼してみたらどうだろうかと提案すると、皆も賛成してくれた。
小野田謙二氏は元全学連の書記長で、元革共同の学対部長だった。東大、早大、都立大、埼大の中核派を育て、三派全学連の成立に大きな影響を与えた人物だった。その後、67年に革共同を離れ、当時は雑誌“遠くまで行くんだ”の編集、発行責任者であり、早大や埼大の反戦連合に少なからぬ思慮的影響を与えていた。彼との出会いは池袋の“白鳥”だった。私も彼から学生運動の活動理念に大きな影響を受けていた。
講演会の企画や実行は経研時代に新崎氏の時に経験していたが、その時は一年生でサークルに入ったばかりで、ほんの使い走りだった。今回は、講師は友人であり、尊敬する小野田さんだったし、是非とも成功させたかった。
前回の経験から余り大きな教室を借りて、入りが悪く見えるよりも比較的狭い場所で人が立て混んだ方が良いと思い、法學部の収容能力百人程度の教室を借りることにした。情宣用のビラを作り、立看を立て、各自治会、党派の人々にも呼び掛け、当日は7号館前でビラを配り、ハンドマイクで精力的に情宣活動を行った。
その結果、この種の講演会としては異例と言える多くの聴衆が詰め掛け、教室の八割り方を埋め尽くし、M・L派の本間さん、青解の上森、百武さんなどの党派の人達も彼らなりに批判の目を向けてながらも聞き入っていた。
講演は日本近代に於けるインテリゲンチャの置かれた位置についてだった。講演会が終わってから、小野田さんと喫茶店でコーヒーを飲んでいると、彼は第一次の明大学費闘争の頃、よく学館に泊まり込んだ事など当時の思い出話をしてくれた。
私も日頃から尊敬していた小野田さんを自分の大学に呼ぶ事が出来て嬉しかった。
講演会の成功は三サークルの結合を更に強めると同時に、対外的にも我々の力を見せ付ける事になった。

- 26 -

新入生獲得のオリエンテーションが終わった直後の4月12日、明大記念館で、日大闘争の一周年記念集会が行われた。

日大共闘は各地の拠点を追われて明治の学館に拠点を移していたが、権力は非常な力を持って、日大共闘を潰しに掛かっていた。この日もデモは不許可で、デモ隊が記念館から明大通りに出ると、機動隊が攻撃を加えて来た。明大の党派は直ぐに援護の部隊を出して戦っていたが、我々は未だ新入生獲得が終わってサークルの基礎固め、4. 28の行動に向けた準備に追われていて、日大の諸君は頑張ってるなどという感覚でしか捕らえていなかった。

明大通りを追われたデモ隊はマロニエ通りに逃げ込んできた。

マロニエ通りに入ればこっちのもの、通りは狭いし、両側に在る学館と9号館のベランダから投石や消火栓を使った放水が出来るので、学生側に有利だった。機動隊もなかなか通りの中までは入っては来なかつたが、この日は調子に乗って、旧学館の入り口（現在の生協書籍部入り口）から乱入して不当逮捕を行い、サークル活動をしていた一般学生にもリンクを加えた。

この事件は明大の学生運動のエネルギーに一挙に火を点けた。

14日、大学当局は休校措置を探ったが、学生側は抗議ストとし、記念館で対学長大衆団交を開いた。

3時頃、バイトを終えて、記念館に出かけると会場は満員で、二階のバルコニーからは各自治会、党派の旗が垂れ下がり、なかなか壯觀だった。

議題は主に12日の機動隊の学館乱入に対して、大学としてどの様な措置を取るのか、また、東大、日大両大学闘争にショックを受けた政府自民党が臨時大学措置法いわゆる大学立法を準備していたので、大学立法に対する大学側の見解を求めて行くと言つた。

学生側に対応する中川学長は容姿もさる事ながら、ノラリクラリとした受け答え、しぶとい忍耐強さが奥田京大学長に似ていたので、西の奥田か東の中川かと言われていた。

中川学長のしぶとさとは無関係に、この時点では大学側も被害者を装っていた。大学立法に対しては反対声明を出していたし、機動隊の学館乱入に

- 27 -

対しては中川学長名で神田警察署長を告発していた。（告発はその後うやむやの内に取り下げられた。）

この様な対応を取られると、学生側も深刻な学内問題を抱えていないので、深く追及する事が出来なかつた。明大は以前から学生運動の先進大学だったので、個別の学内問題は余り無かった。

この日は学長の健康上の理由もあり、8時頃、翌日の団交継続を確約して大衆団交を終えた。団交の後、明大通りを御茶ノ水駅までデモを行つた。

12日で懲りたのか機動隊の規制は殆ど無かつた。

翌15日、再び大衆団交が行われたが、昨日と同じ内容の両者の主張が空回りするだけで、新しい進展は無かつた。辛うじて寮や農学部などの学内問題を提起し、次回は対連合教授会との大衆団交を要求して、団交は終わった。

14

4. 28沖縄闘争を取り組む事には皆異論は無かつたが、ではどう行動するかと言う事になると我々は困ってしまった。

これまで個人、またはサークル有志という形で、度々闘争に参加しては來たが、闘争主体をサークルとして取り組むという事には未経験であった。

サークル全体で行動するとなると、思想的にも行動的にも未だ学苑会や研連の党派と共に行動するまでにはなつて無かつた。

ペ平連に対しては彼らは単に市民主義者であり、思想性が無く第二戦線的だという非常に馬鹿げた偏見を持っていた。（我々も行動は第二戦線でしか無かつたのに。この偏見は後日、一寸した事で取り除かれ、以後彼らとは強い共闘関係に入るのだが、それはまだ後の事である。）

いざ行動を起こすといつても、何処の集会に行き何処の部隊とデモを組めば良いのかという問題で、困ってしまった。

我々の動員力は十五名だった。

そんな時、“白鳥”での友人の一人に山谷さんという人がいた。

- 28 -

彼は大学を中退して『70年建築家行動委員会』という、主に建築の仕事に携わりながら戦っている人々の所にいた。事務所が池袋に在ったので、私も度々そこに入りしていた。

事務所は池袋駅から目白の方に10分ほど歩いた自由学園の近くに在り、昔、その辺は雑司ヶ谷と呼ばれ、池袋に近いのに係わらず大きな屋敷とアパートの入り交じった静かな戦前からの文化住宅街だった。

彼らも出版や新劇の同じ様な組織に呼び掛けて、4.28の戦いを準備していた。我々のサークルの実情を話し、一緒に共闘出来ないだろうかと提案すると快く受け入れてくれた。

サークルとしての初めてのデモは『70年建築家行動委員会』と共に闘う事になった。

昨年の10.21闘争、安田講堂闘争を勝利したと総括していた党派は勿論、大学立法に反対して全国の多くの大学がバリケードストに入っていたし、秋に予定されている反安保闘争決戦に向けた主要な前哨戦と見られていた今年の4.28は特に盛り上がっていた。

戦術的にはブンド及びML派を中心とする党派部隊は医科歯科大を出撃拠点として、御茶ノ水を制圧して明大通りから気象庁を経由して霞ヶ関に進出し、また、中核派、解放派を中心とする党派部隊は品川駅に結集し新橋駅を経由して、銀座方面から攻め上り、また、ベ平連、無党派の反戦青年委員会や市民グループは東京駅近くの常盤橋公園に結集し、御茶ノ水方面から進撃して来る党派の部隊と合流した後、日比谷方面に進出し、霞ヶ関中枢を制圧して、解放区を創り出す予定であった。

マル研を中心とするサークルグループは当日、3時に上江洲、岡田、賀茂君が部室に集まり、ヘルメット、旗を用意する。他のメンバーは5時、常盤橋公園に現地集合する事にした。

部費で初めてヘルメットを購入した。表にマル研、裏には明大と書き込こまれた白いヘルメットはなかなか格好良かった。ヘルメットにマル研の文字を

- 29 -

見た時、正直、我々もここまで来たんだという感激があった。

旗は未だ無かったので、60年安保闘争の時には国会内まで入った旗だと言い伝えられていた経済研究部の旗を使うことにした。

当日は4時過ぎまで、『70年建築家行動委員会』の事務所で、テレビを見たり、入って来る各種情報を聞いて、なるべく状況を掴む事にした。得られた情報では医科歯科大に集結している部隊は機動隊に包囲されて一步も大学から出られない状態であったが、品川に集結した部隊は新橋駅近くまで進出しているとのことであった。

5時に常盤橋公園に行くと、既に来ていた上江洲さんたちに状況を報告した。賀茂君が肩を痛そうにしているので、どうしたのか聞くと、彼らは3時に部室に集まり、3時半頃ヘルメット、旗を持ってここに来る途中、水道橋駅付近で右翼らしい数人の男に襲われ、その時、彼は木刀の様な物で肩口を殴られてしまった。

折角、購入したヘルメットは日の目を見ること無く、彼等に奪われてしまったが、所詮は消耗品。それよりも賀茂君の負傷が軽かったので、ホッとした。

5時過ぎ、建築家グループや出版反戦と簡単な集会を行って後、デモに移り、初めて我々は独自の隊列を組み、岡田さんがデモ指揮を取った。

常盤橋公園を出て国労会館の前を過ぎ都庁の側まで進むと、前方に機動隊がジュラルミンの盾を立てて、阻止線を張っていた。隊列を強固に組み直して、二度三度と阻止線の突破を試みたが、その都度、機動隊の打ち出す催涙弾に進路を阻まれた。しばらくすると機動隊はデモ隊を蹴散らすべく突っ込んで来た。たちまちデモ隊は混乱状態になり、国労会館付近まで押し戻されてしまった。再度、態勢を整えて、今度はデモの隊形を取らずに散開して、そこいらに有った石を拾い、投石しながら前進を開始した。再び、初めの地点まで押し返したが、機動隊も阻止線を強固にして、催涙弾の水平打ちで答えた。我々も投石で応戦して、一進一退を繰り返している内に、工事現場から持ち出した器材で道路にバリケードが出来て、誰かが古タイヤに火を付けた。辺

- 30 -

り一面は催涙弾のガスと古タイヤの煙で口を開けていられない状態で戦いは膠着状態になった。野村さんと付近の偵察を行う事になり、裏通りに迂回して機動隊の後ろに出てみた。辺々には私服が立っていて、我々をうさん臭い目で見ていた。その結果、前方に展開している機動隊の数は意外に少なくて百名ぐらいだった。しかし、彼等は少数であるがゆえに必死で、度重なる攻撃を催涙弾の一斉射撃で阻んでいた。このような状況の中で、M.L派の本間さんに遭った。彼の話では医科歯科大は完全に包囲されていて、一步も外に出られず、僅かに御茶ノ水駅付近で小競り合いを繰り返し、脱出した三百名ぐらいがやっと辿り着いたと言う事であった。

個々に脱出した三百名の部隊ではデモの核になり得ず、戦もここまでだった。
10時頃、我々は引き上げた。

後に判った事だが、この日の戦では品川に集結した部隊は新橋で、激しい戦を展開しながら、一部は有楽町まで前進を続け、東京駅付近から進出していた我々とあと僅か数百メートルで、合流出来る地点まで来ていた。しかし、機動隊の強力な阻止線を我々は突破する事が出来ず、有楽町方面で多くの逮捕者を出す結果となった。

友人の山谷さんが一時機動隊に捕まり、投石避けの盾にされた。

医科歯科大に行った政研の林君が機動隊の投げた石が鼻に当たり重傷を負った。池袋の事務所で知り合った理科大建闘委の市川君が銀座で逮捕された。

結果論だが、1月の東大の時といい、今回の4.28といい、街頭闘争の戦術は何時もあと一步のところで権力の前に屈しているが現状だった。

4.28の総括を巡って、特にブンド内部では意見が大きく分かれて、その後、赤軍派を生むきっかけと成って行った。私たちはサークルとしての初めての対外行動であり、この戦いを勝利したと評価して総括していた。

69年、4.28闘争は幻の霞ヶ関解放区を我々に残して終わった。

4月30日、対連合教授会団交が開かれた。

議題は寮、学館、農学部、学生処分の学内問題と大学自治、大学立法について行われたが、大学立法に対しては大学側も反対すると言い、学生側も学内

- 41 -

問題については運動が盛り上りを欠いている現状で、議論は空転するばかりだった。

大衆団交はプロパガンダとしては有効でも、実質的な運動の新しい局面を開く事にはならなかった。どうしても時間が経つにつれて話が感情的になり、会場内からヤジが飛ぶので、実質的な討論にはなら無いなあと思った。私の様に未だ運動に主体的には取り組めず、一般学生と活動家の間をフラフラしている様な者が聴衆者には多かった。

特にこの日の団交の中で、感じた事は木下教授など学外で進歩的な意見を述べている教授達がこの様な席に立たされると、途端にそいらのガンコ親父と変わりなく、感情剥きだしで、ヒステリックに怒るのを見せられると、何か滑稽な思いに駆られた。

15

5月に入ると明大通りは日大全共闘の経済学部デモ、文学部封鎖など各種の一周年記念闘争が週に一度の割合で戦われた。そのつど、カルチャーラン方式の解放区が出現した。一連の日大全共闘の記念闘争にサークルとして取り組むことは無かったが、個人的には登校して来れば、そこに闘争現場があるという事で、必然的にまた積極的に参加した。

記念館で集会を終えた日大の諸君は4時頃デモに出るのだが、このデモは何時も不許可だった。通りに出ると機動隊が待ち構えていて催涙弾を打ち掛けた。私たちも街頭に出て援護の投石をしたり、記念館の屋上から放水や投石でデモ隊を支援した。放水といえば、記念館三階の消火栓を開いて放水するのだが、水圧が足りなくて機動隊まで届くことは滅多に無かったが、逆に機動隊の放水車の放水は我々を直撃するので、やっぱり放水車の水圧は凄いんだなあなどと変な所で感心した。しかし、我々の弱い放水も我々には非常に役だった。なぜかといえば、記念館の屋上や三、四階から投石する我々に向けて、機動隊は催涙弾を打ってきたが、屋上や床にジャージャー水を撒

- 42 -

くと、催涙ガスの粉が飛ばず折角の催涙弾も殆ど威力が無くなってしまうからである。

これとは別に日大の諸君には氣の毒な事も多かった。

日大はキャンバスが各地に分散していたので、遠くから来た人の中には御茶ノ水付近の地理に疎い人も多かった。明治学内に機動隊が乱入した時など、逃げる方向を間違えて逮捕される人が数多いた。この点、我々は目をつぶっていても御茶ノ水界隈を歩けるぐらい路地の一本一本まで知っていたし、迷路の様になっている記念館の構造や記念館から短大を経由して錦華公園に抜ける通路にも精通していたので、捕まる様な事は無かった。

或る日、記念館前で日大芸闘委のゲバ隊長が捕まったが、彼の堂々とした態度には回りから大きな拍手が沸き起った。日大芸闘の粘り強い闘争には熱い想いが有った。この頃になると、機動隊の学内乱入も頻繁になって来た。

5月2～6日、研究部連合会主催のリーダースキャンプが明大信濃学寮で開催された。

リーダースキャンプとは次代のサークルのリーダーを養成する研修会というものが建て前だったが、実態は研連の我々に対する政治教育の場であり、日頃、横の繋がりの少ないサークルの親睦の場だった。

2日の朝、総勢七十人ぐらいが御茶ノ水駅に集まり信濃境へと向かった。

ゴールデンウィークに遊ぶ学生グループにすぎないのだが、ちょっと違うのは研連の赤い旗が有った事ぐらいだろう。

四泊五日三食付き交通費込みで、参加費用は二千円と安かった。

信濃学寮は明治大学が持っている中で一番大きな学生寮だった。中央線の信濃境駅から歩いて30分ぐらいの八ヶ岳の麓に在り、回りには人家も無く、白樺の林に囲まれ、前方には八ヶ岳が広がり、後ろには甲斐駒が立つ、景色と空気の良い静かな場所だった。元ユースホテルを大学が買収したらしく、グランドやテニスコートを持つ収容人数三百人ぐらいの大きな寮だった。

寝台列車の様な二段ベットが並び、和室や洋室の会議室が各棟に一つづしか無かったので、酒盛りには不便なのが欠点だった。

- 43 -

今年のリーキャンでは金子さんがマル研から初めてレポーターに選ばれた。この様な事は民青主導の経研時代には考えられ無かった事で、マル研を中心とした三サークルの運動が次第に学内で認められ始めた事を物語っていた。今、私の手元に有るリーダースキャンプ要領書を見ると、金子さんのレポートは自主講座に主題を置いて、「僕達は現代の大学が巨大なブルジョアヘゴモニー装置として存在していることを見抜き、大学そのものを根源的に拒否して、そして、大学を批判することによって未来社会に向けたプロレタリアート大学を展望しなければならない。そこでは反大学の思想の中から、サークル、ゼミ、クラスを中心とする自主講座を具体的な姿で追求していくことが迫られている。」と書いてある。また、政研の林君のレポートでは明確にバリケードストライキが想定されている。（林君は4.28で負傷して参加出来なかった。）

この時期、皆の頭の中では予感としてのバリケード闘争、自主講座が既に想定されていた。

リーキャンでの日課は、9時までに朝食を済ませて、9時半頃から午前中は班別の討論会だった。各自治会から派遣されている活動家が学内外の諸情勢を説明し、討論が行われた。学生運動とは無縁のサークルからの参加者が半数近く占めていたので、既に知っている学内情勢の説明が多くて、少々物足りなかった。しかし、サークルから選ばれている各班のレポーターは今後想定される闘争とサークルの関連について、真剣なレポートを行っていた。

学内外の闘争をサークルがどの様な形、位置で担って行くのか、非常に興味深かった。

午後は昼食の後、再び討論を行うのだが、2時近くになると討論も緩慢となり、もっぱら、各班対抗のソフトボール大会に変わる事が多かった。

高校を出てから、野球をする機会は無かったので、広いグランドでのソフトボールは楽しく、各人の意外な面を知ることもあった。

II政自の三井さんは高校時代は野球部だったとかで、凄く上手だった。

夕方は各自思い思いに学寮の回りを散歩したりして、夕食後は9時近くまで、各班別の討論会が行われた。

- 44 -

私は6班に属し、レポーターは研連の小宮さんだった。彼のレポートはブンドの主觀が強く出ていて、学生のバリケードストと地域労働者が結合したマッセンストライキを打ち抜く、政治闘争の中での文化運動、文化戦線論であり、その情況全般を支えるものとして、サークル、個人が有ると言う論旨だったので、私には論点が違うと思える所が多かった。

班別の討論会が終わると後は自由時間で、私たちのように社会科学系のサークル部員は自然に各棟の会議室に居た自治会の人々の所に集まり、酒を飲みながら、学内外の政治情勢やまた女子にフランクな話など、活動家個人の個人的な話も出て、楽しい酒盛りが夜遅くまで続けられた。

5日、最終日の夜は体育館の様な食堂で、夕食に引き続いだオードブルなども出る豪華な全体コンバが行われた。酒も回る内に歌も飛び出し、小宮さんや三井さんが中央のステージに立ちブンドの唄など歌い、楽しく、賑やかに夜はあけて行った。

16

俗に“学生部占拠事件”若しくは“学苑会正規軍出動事件”呼ばれた事件が起った。

5月8日午後8時頃、部室で“資本論”的學習会を行っていると、記念館の方からガタガタと物を壊す音や人が叫ぶ声が聞こえて来た。この頃になると、笛の音が聞こえるとデモだと思うし、ゲバルトが始まると独特の音が有り、それらの音に私たちも敏感になっていた。この夜の音は単なるモノイズでは無かった。學習会を中断して記念館へ走った。

学生部の前で、黒ヘルや青ヘルの三十人ぐらいがバリケードを築いて、「学生部を占拠した。学生部長との大衆団交を要求する。」とアツィートしていた。

私たちは少し変な事に気が付いた。何時もなら、この様な時に必ず居るリーキャンにも参加するブンドやML派や青解の主要な活動家が見当たらず、顔も知らない人が多かった。そして、学苑会やII政自、II文自等の自治会の旗

- 45 -

も掲げられていなかった。

学館の研連事務局に行ってみることにした。この頃になると、マル研も有力な新左翼系サークルの一つとして認められて来たので、研連や学苑会を通じての動員要請や学内の行動については事前の情報を知らされていたのだが、この夜の行動に関しては何の事前情報も受けていなかった。

大学院の前に差掛ると、向こうから政研の田村さんがかなり興奮した顔付きでやって来た。金子さんが事情を聞くと、この間の団交の成り行きを不満とする一部の青解とII文の学生を中心とした部分が学生部の封鎖に踏み切ったが、学苑会やII政自、II文自の執行部はこの行動を認めず、今、対応を協議している所だと言った。この時、II部文学部は大学立法に反対して、三日間の时限ストライキ中だった。彼等としては时限ストから発展して、全学ストに持ち込みたいと学生部封鎖に踏み切ったが、運動実態が全II部の運動に成り得て無かったし、特に秋の闘争との関連で、各党派とも未だバリケードストまでは考えていないかった様だ。

学館に着くと、ML派、ブンドの部隊が中庭に集まり、出動のかまえを見せていた。暫くすると、五、六十名の部隊は「封鎖解除。」とシュプレヒコールを上げながら、学苑会旗を先頭に学生部へ向かってデモを始めた。

今、学内で衝突が起こると大変な事になると心配しながら、デモの後に付いて行った。学生部にはバリケードが築かれ、回りには二百人近い野次馬が詰め掛け、その中にはモグラ横町の住人も多く居た。突撃する様子は見られなかつたが、ML・ブンドの混成部隊は記念館前に展開した。

青解の上森、百武、MLの本間、ブンドの上原さんなど、学苑会中執の人々がバリケード内に入つて行った。20～30分して、彼等は出て來た。

部隊はバリケード内の人たちの武装解除を平穏に行い、彼らは学館に連行された。衝突にならなかつたのは喜ばしい事だった。

学館に連行された彼等は、田中さんら中心メンバーは二、三発殴られたが、永田君ら他のメンバーは学苑会の中執から懇々と説教をされるという感じで口頭で怒られたと、後日、この事件の時バリケードを造った側に参加していた田中さんや永田君は言つてゐた。

- 46 -

発生から終末まで、何処か滑稽な“学生部封鎖事件”は、活動家諸個人にパリケード闘争を希求するエネルギーは蓄積されていても起爆剤と成り得る学内問題が無いという焦り、そして、秋の闘争まで出撃拠点としての明大キャンパスを平穏に維持して置きたい全国党派レベルでの思惑が微妙に絡み合って、そのまま当時の明大学生運動の困難さを現していた。

同時に党派の持つ力の強さとある種の恐ろしさを感じさせる事件だった。結局、この騒ぎは3時間ほどで呆気ない幕切れと成った。

この頃、私は一人の新しい友人と会った。

話は少し前に戻るが、4. 28闘争に参加しようと、山谷さんの事務所に出入りしている時に、市川君という理科大生と知り合った。彼は小田原出身で理科大野田の建築学科闘争委員会のリーダーを務めていた。髭を生やしていたので、皆から“ゲバラちゃん”と呼ばれていた。池袋の事務所では顔見知り程度の関係だった。

或る時、5号館の前を歩いていると、二階のベランダから「石川君、石川君。」と呼ぶ声がした。誰かなと見上ると市川君が女子学生と二人で立っていた。「何で、こんな所に居るの。」と聞くと、「彼女が明治のⅡ文だから会いに来たんだ。」と言った。「同じ小田原出身で、映画研究会に入っている弘子ちゃんだよ。」と私に紹介した。「授業が始まると。」と弘子ちゃんは言って教室に入って行った。「折角会ったのだから、僕らの部室に来ないか。」と彼を誘った。部室には上江洲、野村、金子、賀茂、小杉と、いつも面々が揃っていた。皆、大いに歓迎し、ひとしきり4. 28の時の話が弾んだ。お互いの大学の情況を話し合っていると、市川君から理科大の校舎が千葉県の野田に在るので、東京での闘争に参加するのに野田での集会を終わってから出て来ると、特に昼間のデモや集会に遅れて、困っていると言う話が出た。それならば旗やヘルメットなどデモ機材を我々の部室に置いておいて東京で集まれば良いし、この部室を会議の場として何時でも提供しよう。泊まる必要のある時は学館に泊まれるように研連に話をしようと提案した。そして、更なる共闘関係を結びたいと申し出た。

- 47 -

彼はこの提案を一応帰って他のメンバーと相談してから決めたいと言ったが、非常に喜んでいた。

その後、我々マル研と理科大建闘委は、度々、一緒に隊列を組む様に成了。市川君とは弘子ちゃんと住んでいた川崎のアパートに何度も遊びに行ったり、70年の初頭に彼が逮捕された時には巣鴨に面会に行ったりする親しい友人になった。

5. 8、“学生部占拠事件”が大衆団交とは異なった意味で、明大内のエネルギーの表現となり、この事件を契機にして御茶ノ水の街は次第に暑い夏に向かって大きな蠢動を始めた。

5. 12、再度の対連合教授会団交、5. 16、10号館130番教室寮団交と明大内の闘争が加速度を付けて取組始められて來た。

この様な学内の動きに平行するように前記した各種の日大の一周年記念闘争が火に油を注ぐ様な形で戦われた。

5. 21の日大理工学部奪還闘争が激しく戦われ、5. 22には明大の学館が強制捜査を受けた。十六名の学友が不当逮捕された。

5月23日、全都大学立法粉碎集会が記念館で開催された。集会の後、御茶ノ水カルチャーラン闘争が戦われた。機動隊が記念館にも乱入し、御茶ノ水界隈は大変な騒ぎとなつた。

バイトを終えて登校した4時頃には戦いは既に始まつていて、地下鉄の御茶ノ水駅に降りると前方は機動隊の厚い壁でとても大学までは辿り着けない状態だった。再び地下鉄に乗り淡路町駅で下車して、神保町に向かって歩き出した。途中、駿河台下にも多数の機動隊が道を塞いで、明大の方は催涙弾の白い煙りが立ち込めて目が痛くなってきた。「今日は激しくなるなア。」と思いつながら、パチンコ屋の人生劇場横から錦華公園の脇を抜けて、記念館の裏に出て、生協の入り口から入って部室にやっと辿り着いた。

部室の中は催涙ガスが漂い目を開けていられ無い状態だったが、そんな事にお構い無くといった風で、上江洲さんが昨今の団交や政治情勢に関するビ

ラのガリ切りをやっていた。

私は興奮ぎみに「上江洲さん何やってんだ、早く、屋上に行って、戦おう。」と言うと、「僕はガリ切りを終わってから行くから。」と言った。その落ち着いた態度に興奮して、部屋に飛び込んだ自分が恥ずかしく思へ、こんな時までガリ切りをしている上江洲さんは大した者だなあと内心思ったが、部屋にいたところで仕方がないので、「では、屋上に行ってますから。」と言い残して屋上に急いだ。屋上では催涙ガス避けの水が撒かれ、タイルを剥がしての投石が始まっていた。機動隊は我々を狙って催涙弾を撃って来た。屋上に届く頃には勢いが弱まるので直撃を受けることは無いが、それでも我々を狙っている機動隊員と目が合うと、自分が狙われている様な気がして怖かった。暫く投石をしていると、次第に外のデモ隊が押され始め、放水車や装甲車が前面に出てきた。そろそろヤバくなってきたなあと思い部室に戻ろうと、二階まで降りてくると、誰かが「丸機が入ってくるぞ！」と叫んでいた。急いで部室に駆け戻ると「上江洲さん、ヤバイよ、丸機が入ってくる。早く逃げないと、パクられるよオー。」と言って、部室に鍵を掛けて急いで避難した。一階からガタガタと音を発して機動隊が乱入してきた。このまま階段を登っていくと、一階の玄関に出ていまい機動隊とハチ合わせになるので、応援団の部室の横を通りて体育会事務局の脇を抜け、錦華公園に脱出した。明治大学の裏側の錦華公園の方は民家や一般の会社などが隣接しているので、機動隊は東大の様に明大だけを孤立させて包囲することが出来ず、必ず包囲網に出入り口を設ければならない弱点を持っていた。だから、御茶ノ水の街頭闘争で機動隊の追われた時は特に迷路の様に入り組んだ記念館を通じて錦華公園に出て、神保町方面に逃げるのが鉄則で、間違っても御茶ノ水駅や中央大学の方に逃げるのは路地が無いので、パクられるから厳禁だった。御茶ノ水の地理に不案内な日大や他大学の人の中には逮捕されたり、逮捕されないまでも建物の中に乱入した機動隊に多数の人が殴られた。特に図書館では逃げ込んだ日生を読書室まで追いかけて来て、テロを加えたという話も後で聞いた。また建物の至る所に催涙性の粉末を撒き散らして行き、二日ばかりは記念館や学館に入ると目が痛かった。

モグラ横町の一一番奥に在った我々の部室は幸に無事だった。

5月27日、対理事会・連合教授会団交が91番教室で行われた。

前記した内容と変わり無かったが、一つ新しい問題として、学生部の廃止問題が持ち上がって来た。当時の松田学生部部長が学生の目を欺く機関として設置していた大学改革委員会（何等の改革もなされ無かった。）で学生部の廃止が話し合われていると口を滑らせた。松田部長のこの一言によって場内は騒然と成り、以後、学生側は強く学生部の廃止を迫って行った。

学生部の役割はサークルなどが教室を使用する時にその申し込みを受けたり、学生にアルバイトの斡旋を行ったり、学生へのサービス機関と思われがちだが、もう一つの役割は学生運動を監視する大学側の目であり、耳だった。個人的には学生部の職員には良い人が多かったけれど、組織の役割の本質は我々と敵対関係にある機関だった。

6月7日、5.23闘争の件で、学館が強制捜査を受けた。

6月11日、全都全共闘の結成大会が明大記念館で開催された。

昼から、東大、日大を始め、早稲田、中央、法政といった各大学の全共闘が一同に集まり、二階のバルコニーには各大学の色とりどりの旗が飾られ壯觀だった。会場は満員で中に入りきれない部隊は中庭でデモや集会を繰り返していた。唯一一つ皮肉な事に会場を提供している明大に未だ全共闘が無く、学生会、学苑会という形で参加していた。

サークルとして組織的な参加はしなかったが、個人的に私、上江洲、金子さんなども、興奮気味に部室と会場を行ったり来たりしていた。

集会に参加して全都全共闘の結成を見ながら、明大にも早急に全共闘を創設しなければならないと思いつつ、未だ学内の態勢が出来ていないし、全共闘が出来ればバリケードストは必至だし、でも、明大の機能として秋期決戦に

向けて、バリケードが作られるのは夏休みが明けた10月に入ってからだろうとか、色々な事を考えていた。

4時頃、集会は終り明大通りへのデモに移った。

デモは不許可で記念館をを出るとすぐに機動隊が攻撃を加えてきたが、この日は全都規模の动员で、人数も多く別動隊が5号館裏からマロニエ通りを抜けて7号館の脇から明大通りに進出した。記念館から出た本体は大いに前面の機動隊を圧迫し、彼等は中大方面に引き上げた。デモ隊は駿河台下の方も牽制しながら御茶ノ水駅付近まで進んだ。中大などに通じる脇道をバリケードで固めてから明大通りの旧学館の前と記念館の前にもバリケードを築いて、この空間を解放区にした。

旧学館前のバリケードで戦っていると「石川君、石川君。」と呼ぶ声がするので、振り返ると“白鳥”で、ウェイターをしていた雨宮さんだった。

彼は明大の二年先輩で経営学部にいて、学生運動には余り興味は持て無かったが、今日は見に来たのだと言った。暫く一緒に戦っていると、「石川君、腹減らないか。」と聞いてきた。昼飯を食べただけなので、そう言われると急にお腹が空いてきた。「飯にしようや。」と言うことで、二人で記念館の師弟食堂に向かった。「この騒ぎじゃ、閉まっているんじゃないかなあ。」と言ったが、行ってみると平常通り営業していた。内心、商売人は凄いなあと思ったが、そんな考えも一瞬で、百二十円のAランチをかけこんだ。

彼と別れてバリケードに戻ったが、機動隊が放水車を先頭に攻撃を始め、我々も次第に押し戻されて、校舎に戻らざるを得なかった。

7時を過ぎると解放区も消えて、各大学のデモ隊も三々五々引き揚げた。

催涙ガスがまだ漂う部室に戻ると、皆もバラバラと引き揚げて来ていた。

早速、皆で今後の情勢を巡って、意見を交わした。バリストに入るのが早くなり、夏休み前にも入るかもしれないとの意見も出て、早急に三サークルの連合体を組織として造り上げるという事で意見はまとまったが、未だバリストは秋になってからだろうとの見方が強かった。

明治大学の党派について言うと伝統的にブンドが強かった。

I部 中央自治会・学生会 ブンド 社学同

学部自治会 政経学部・経営学部・工学部・農学部 ブンド 社学同

法学部 社青同 解放派

文学部 社学同 M L 派

商学部 革共同 中核派

文化団体連合会 (文連) ブンド 社学同

II部 中央自治会・学苑会 社学同 M L 派

学部自治会 政経学部 ブンド 社学同

文学部 社青同 解放派

研究部連合会 (研連) ブンド 社学同 の各派が握っていた。

II部法学部、商学部は民青が握っていたが、昨年の学館襲撃事件以来、その執行部は罷免されて、公式な活動は出来なかった。

II部法学部には解放派、商学部にはM L派が進出しようとしていた。

中央自治会と文連、研連の予算が大きかったので、これらの自治会を握っていた党派は資金的に豊だった。

明大で特筆すべき事は革共同系の両派、特に革マル派が集團としては存在し無かった。中核派もI部商学部だけで、全学的に見ると少数だった。

その結果新左翼内部での党派闘争が少なく、勢力も安定していたので内ゲバも少なくて学内は平和だった。反面、運動に対して党派の支配が強かった事と、大学当局が第一次明大学費闘争での教訓を活かして、学生の管理を割合上手に行っていたので学内問題は少なかった。この双方の要因で全学を根底から搖がす様な学内闘争は組めなかった。

明大の活動家は対権力闘争や学外の党派闘争では、各派の先陣を切るトップゲバルターは数多く輩出たが、理論家やクラス運動、サークル、文化運動といった幅広い運動に取り組む活動家は少なかった。しかし、この様な学内環境は活動家にとっては住みごこちの良い所で、党派を超えた友人関係や義理、人情の通ずる独特な学生運動の環境を作っていた。